

二十八の瞳

平成二十八年七月三日

私、東郷芳雄がここ八ヶ岳の山荘に引きこもってから半年が過ぎた。妻と十四歳になったばかりの娘を失った航空事故から一年が経っていた。徐々に現実を認識しつつあった。半年前JG物産の社長職を返上して父親に会長と社長の職を兼任してもらい、相談役となった。それほどあの事故の衝撃は大きかった。ただ父親からは創業者一族としてJGグループの持ち株会社である東京のJGホールディングにも席を置くように言われたこともあってJGホールディングの相談役にも就任した。両社に相談役として部屋を与えられていたがこの半年、出社することは無かった。アメリカの航空会社の弁護士からは、最高の補償額を提示してきたが、現実を引き戻される恐怖からハンコは押せなかった。自分の人生を振り返る日々で一番、頭に浮かぶのは瀬戸内海S島の中学校での、三年間だけの数学教師生活だった。教師のスタートから最後まで担任として八人の男子生徒と六人の女子生徒。愛らしかった彼女らと娘の姿がダブルことになった。十四人の

生徒と共に勉強し多感な時を過ごした。奇しくも二十八の瞳と私は名前を付けた生徒たち。二十四の瞳の先生は美人の女先生だと言ったのは、学級委員の川上純君だった。その後、あの十四人はどのような人生を歩んだのだろうか。現在彼らは四十一歳になっている。彼らが卒業と同時に日本を離れてしまい。彼らの相談相手にもなってやれず、申し訳ない気持ちだった。それというのも彼らの卒業式の翌日、兄が交通事故で亡くなった。その十年前、父と母は離婚していた。母は、神戸の大学で教鞭をとっていて、東京でJGグループを祖父と父は主導していた。父がJG物産の社長に就任してからは、ますますすれ違いが激しくなり母も大学教授を辞めようとはしなかった。離婚したとき私たち子供三人は決断を迫られた。その結果、兄は父の元へそして私と妹の薫は母のもとに引き取られた。兄の死後、母は、離婚の大きな原因は自分にあると自覚していたこともあって、父が私を手元に呼び戻したいと言ったときあえて反対をしなかった。兄への贖罪の気持ちもあったと後に聞いた。

私は、祖父と父の意向でJG物産のアメリカ支社の新入社

員としてアメリカに渡った。アメリカではMBAの資格を取るよう業務命令が下されていた。それから二十四年、数度の一時帰国はしたもののアメリカ人の高校教師メアリーと結婚し娘のジエニスが生まれた。祖父の死により日本に呼び戻されることになった。妻と娘は私が帰国後、娘の学校の都合もあり三か月後に日本に来ることになっていた。日本で当分の間生活するという報告に、妻の実家があるテキサスに二人が向かった時に事故は起こった。妻の父は二人の遺骨を日本に持ち帰ることを拒んだ。私さえ日本に帰ることを決断しなければ二人が事故に遭うことは無かったと言う論理だった。

神戸の母親の元にはS島の寄宿先から転送されてきた、年賀状の束が有ったがそれを読んだのはアメリカから両親への結婚報告で一時帰国した八年後だった。その時は既に生徒との絆は絶たれていた。虫のいい話ではあるが、生徒たちの暮らしが気になってしょうがなかった。恐らく、愛するものを失った今、生きるためには愛する者が必要だった。しかし彼らが私を受け入れてくれるだろうか、判らなかった。生徒が卒業して五年間に届いた年賀状を確認する為、母親の実

家である神戸に戻った。とりあえず彼らの消息を興信所に依頼した。実家には大学の学長を五年前に退いた母滝田登美子と、その大学で教授をしている妹の滝田薫と住み込みで母の面倒を見て貰っているお手伝いのサキコさんの三人だけだった。そして私が大学を卒業するまで使っていた部屋が当時のまま残されていた。興信所からの報告書は個人情報保護という壁に阻まれて、断片的な情報がほとんどだったが、五人の現住所が判明していた。その中の一人、三年間学級委員をしていた川上純君の消息が記されていた。彼は東京の府中刑務所で服役中だった。刑期は三年、罪状は業務上横領・私文書偽造・収賄の罪に問われていた。現在無実を訴えていて高裁に控訴中だった。成績優秀で正義感も強くそしてお茶目な一面を持つクラスでも人気者だった彼がと思うと、心が痛んだ。確か、県内でもトップの進学校であるE高校に進学したはずだった。資料によれば東大にストレートで入り大手商社T物産に入社。同期入社で課長職に着いたが、取引先の機械メーカーとの取引が問題視され会社から告訴された。当然、会社は懲戒免職となり裁判の第一審では有罪とな

り収監された。妻と子供二人が妻の実家にいる。私は彼の担当弁護士を訪ねた。相談役に退いたとはいえ私の名刺はそれなりの効果があった。弁護士の話だと確かにそういう事実があったが、上司の部長及び専務の指示のもとに行われた犯行であり、執行猶予が妥当な判決だが全ての罪を押し付けられたと思われ、会社も首脳陣が関与したとなれば会社ぐるみとされるのを恐れて川上被告の単独犯というシナリオを作ったと確信していると私に語った。私は府中刑務所に川上を訪ねた。刑務所にいる自分を恥じてか最初は面会を拒んだが、三回目に会うことが出来た。彼は涙を浮かべ弁護士が話した通りの事実を語った。私が相談役をしている企業グループJGは総合商社のJG物産が中核企業でT物産とはライバル関係だったが、T物産の会長は父の友人でその息子、現在T物産の常務をしているY君は、アメリカ留学時代、同じカレッジで共にMBAを目指した仲だった。同年齢という事もあって俺、貴様の仲だった。Y君との面会を取り付けた。昼食を共にするつもりで昼時にT物産を訪ねた。挨拶が済むと彼は「申し訳ないが午後一番に急な会議が入ってしまった。

「社員食堂でもいいかな」とすまなそうに言った。続けて、社員食堂で食事をするのは二年ぶりで懸案もある。「世のどこでも同じだが当社も経費削減で社員食堂の経営を外部の業者に委託したが、組合からクレームが組合担当役員の俺に届いていて、一度ここで食事をしなければならなかった」と言った。「組合からは割高だとか不味いと言われている。君の意見も聞かせてくれるとありがたい」と言った。私は、T物産を訪ねた理由を彼に説明した。Y君の説明に依れば、直接の担当ではないが、事件については知っていると聞いた。しかし専務や部長の関与までは知らなかった。私は、「君には悪いが、この件に関しては徹底的に調査し、その結果を公表する」と通告した。彼は「それは君の企業グループを挙げてか」と問いかけてきた。「もちろん」と私は答えた。彼は父親である会長に話してみると答えるのにとどまった。私は最後に「確かにあまり旨いとは言えないな」と言ってT物産を後にした。翌日、T物産は川上君の告訴を取り下げた。ほとぼりが冷めるまで関与した部長と専務の処分は勘弁してほしいとY君から連絡があった。しかも川上君の復職も認め

られないと言う。私にはJG物産から相談役として秘書を一人つけることを認められていた。釈放された川上純君は私の秘書となった。

川上君は大学入学と共に地元を離れたが、東京に住んでいる同級生二人の消息は知っていた。金田健一と河合澄子の二人だった。二人は結婚して河合澄子は金田澄子になり品川でレストランをやっているという。川上は二人の結婚式にも唯一参列していた。というのも川上の妻の裕子は、澄子のOL時代の同僚で、澄子の紹介で付き合いはじめ結婚した。しかし川上の妻と澄子も子育ての真最中で、ここ二年ほどは連絡を取り合っていないと言う。それに加え川上の事件もあってお互いが遠慮していたのかもしれないと川上は私に説明した。私は川上を伴って品川にあると言う金田夫婦のレストランに向かった。その場所に着くとそこは大手の牛井屋の店になっていた。牛井屋店長の話ではレストランは一年前に廃業しており転居先は判らないが連絡先は預かっていると言ってメモを見せてくれた。そのメモには彼らの故郷S島の河合家の住所と電話番号が書かれていた。川上が電話を掛けると

金田澄子が直接電話に出た。電話を替わってもらって不義理を詫びた。彼女はとても懐かしがってくれ機会があれば会ってくれと言った。そこで川上に電話を替わってもらい金田健一のことを尋ねてもらった。澄子は、今ここにはいないと言葉を濁した。川上も事情があることを察してそれ以上は聞かなかった。S島には二人の生徒が残っていた。鈴木裕君と岡部誠一君の二人で鈴木君はミカン農家として、岡部君は漁師として生計を立てていた。二人とも長男という事もあって父親の後を継いでいた。翌日、川上を伴って実に二十六年ぶりにS島に向かった。

金田澄子を訪ねた。私は、川上にはあえて同行を求めず、彼には鈴木裕と岡部誠一の暮らしぶりを調べるように頼んだ。金田澄子は、すすり泣きながら今までの経緯を語りだした。二人が東京で再会したのは二十歳の時だったという。デパートに勤めていた澄子が同僚とフランス料理レストランに食事をしていた時、その店で金田健一はコックをしていた。何か店に通っている間に外で会うようになりやがて同棲するようになり二十五歳の時に健一と、フランス料理の店を出

すことになり入籍した。やがて二人の子供も授かり店も順調だったのだが、近所にフランスで修行して店を開いたという同業者が現れ、決して味では負けていなかったが、その店のシェフがテレビに出たりしたものだからお客が減って、とうとう店を畳んでS島に一家で戻ることになった。しかし逃げ帰ってきたとの負い目に健一は我慢できず家を出て行ったという。しかし毎月の生活費は振り込んでくれていると言う。澄子の話を聞きながら私は、二人の教え子時代を思い出し出していた。金田健一は、小柄でおとなしい生徒だった。それにひきかえ河合澄子は大柄で姉御肌の生徒でクラスの女子ではリーダー格の存在だった。その澄子が私の前でハンカチを手にして、夫健一を心配している。私は、健一の居場所の手掛かりはないかと尋ねると、健一は毎月第三月曜日に生活費を振り込んでくれる。また、家を出てから一度だけ手紙が来て、その手紙には東京の墨田区で就職したので心配するかと書かれていた。その翌月から振り込みが始まったが夫は、高校卒業後一年ほど神奈川県伯父の家から調理師の学校に通っていて、最初の口座を神奈川県に本店があるY銀行で作っ

ていた。その銀行を気に入っていたので今でもその口座を使っているはずと言った。川上に確認させるともともと神奈川県が営業主体のY銀行は墨田区に四か所しか支店がなかった。そのうえ金田健一は手数料の問題もあり必ず銀行に足を運んで、そのATMを使うと澄子は言っていた。第三月曜日は五日後だった。興信所の調査員をその四ヶ所の支店に配置する手配をした。

S島に残っていた二人に関しても川上は、調べてきていた。みかん農家だった鈴木裕君は、みかん農家を既に廃業して岡山市内でスーパーを経営していた。川上の従妹が鈴木に従兄に嫁いでいるのを川上自身、今回はじめて知った。鈴木と川上は親戚筋にあたることになっていた。その従妹の話だと。鈴木は七年前に奥さんを亡くし、娘が一人いる。二年前にミカンを納めていた岡山市内のスーパーの女経営者と再婚し夫婦で岡山市内にある五軒のスーパーを経営しているという。今の奥さんは三十八歳で十年前に離婚して結婚生活はわずか一年で、もともと婿は財産目当てであったらしくすぐに馬脚をあらわし追い出されたという噂があるという。結

婚には懲りたと周囲には話していたと言うが、ミカンを納入していた鈴木君が好きになり、猛烈なアタックの末、結婚したと言う。ここまでならハッピーエンドなのだが、鈴木君の一人娘雅子が結婚に反対していた。丁度、再婚の時期が、娘の大学進学と重なったことで、娘は神戸の大学に進学、家を出て神戸で一人暮らしを始めた。再婚相手の奥さんも娘には気を使っていて、周囲の話だと気の毒で見えられないと言う話も有った。でも娘からすると母親が七年前に亡くなっている以来、父と娘の生活が五年間続き、家事はもちろん父親の面倒を見てきたのに父親を取られたという気持ちも判らなくはないと従妹は話した。

そしてこれは定かではないが、娘はこの二年間、岡山の家には一度も戻ってはいないようだとも言った。度々、父親は娘のところを訪ねて入るのだが、何かと理由を付けて岡山に足を向けないと言う。

又、近頃、娘の生活も少し荒れてきたようで夫婦で心配しているとも聞いた。スーパーの事業そのものは順調で、岡山市内でも有数な資産家と知られ、スーパーの創業者の両親もす

でに他界していて、一人娘であった奥さんが全てを引きついでおり、鈴木君も娘には十分な仕送りをしているが、娘はバイトをしていて、なるべく親のお金を使わないようにしている。それも父親は悲しいと言っているらしい。私は、一度娘に会ってみようと思つて、村上に娘のことを調べるように頼んだ。

もう一人の岡部誠一は独身で一人暮らしをしている。

五代続いている漁師で、五人の仲間と共に漁に出ている。船も自前の大きな船で、経済的には困っておらず只、ここ十年は高齢の両親介護をしていて、なかなか結婚できる状況にはなかった。昨年、相次いで両親が亡くなり現在、広い家で一人生活をしている。そのせいか毎晩のように近くの飲み屋に出没しているとも聞いてきた。その晩、私は村上君と連れ立ってその飲み屋に出かけた。私たちの顔を見て彼は驚いていたが、滝田先生と声をあげ、すぐに昔の愛嬌のある顔に戻った。酒の勢いもあり、いろいろと私はなじられたが、敵前逃亡の罪は甘んじて受けなければならぬ。やはり一人暮らしは寂しいようであった。村上君が、元学級委員らしく好きな

女の人はいないのかと水を向けた。最初は渋っていたが、酒量が増すごとに饒舌になり、どうやら漁業組合の事務員坂田茂子が好きなようだった。茂子は寝たきりの母親の介護をしており岡部も昨年まで両親の介護をしていた関係で、親しく話すようになったが、相手は二つ年上で、お互いそれ以上の関係には至っていない。しかし岡部は一人暮らしになって彼女への気持ち膨らんで悶々としているらしい。そして最後に「大好きで結婚したいがどうにもならん」と言って酔いつぶれた。

翌日、村上が坂田茂子のことを調べてきた。現在四十三歳、高校を出てすぐに漁業組合に入り二十五年間勤めていた。結婚歴はなく見合い話は数多くあったが、母親が病弱で一人娘という境遇では結婚に踏み切れなかった。それと子供の頃に足にやけどをして左足を少し引きずる癖があり顔は十人並みだがコンプレックスもあるようだった。そんなコンプレックスは微塵も感じさせず性格的には快活で、荒くれ漁師が多い組合の中でも輝く存在だった。私は、突然のことで恐縮だが教え子の岡部誠一のことと相談があると坂田茂子を喫茶

店に呼び出した。待ち合わせの場所に来た茂子は当惑の表情を浮かべていた。私はまず「これからお話しすることは岡部君には相談しておらず話の結果いかんでは貴女の胸にしまいい込んでほしい」と言って話し始めた。そしてまず私と教える子たちの関係を話し、その贖罪の意味からも生徒たちの役に立ちたいと念願しており、今回、岡部君の胸の内を貴女に伝えたいと言って、彼の気持ちを説明した。彼女は黙って聞いていたが話し終わると短く「私も岡部さんが好きで結婚したいです」と言った。ただ茂子の話だと二歳年上だし、家には寝たきりの母親もいるのでと悲しそうに言った。私は、姉さんに女房は流行りだし、岡部君の家は広いし収入的にも十分余裕がある。貴女が専業主婦としてお母さんの面倒を見ることもできる。彼にはその意思も持ち合わせていると言い、続けて「この件に関しては私に任せてもらえるだろうか」と問いかけた。茂子は「岡部さんがよろしければお願いします」と頭を下げた。その晩、私は岡部君行きつけの飲み屋で彼を待っていた。彼が暖簾をくぐると直ぐに茂子のことを話した。すると酒を一滴も飲まず工務店に行くと言う。彼女と母親の

為にリホームの相談に行くと言う。三日後、漁業組合長の仲立ちで二人の婚約が決まった。私は二人の結婚式の出席を約束して島を離れた。

人生のめぐりあわせとは不思議なものだと思う。鈴木裕の一人娘雅子が通う大学は、妹の薫が教授をしているU大学だった。そして学科も妹が主任教授をしている物理学部理数工学科だという事が判った。

村上を通じて興信所から金田健一の消息が判ったとの連絡だった。金田健一は予想通りY銀行の墨田支店に現れたと言う。調査員が尾行して確認したところ現在はカレーチェーン店で働いていた。私はT物産のY常務に電話を掛けた。「その後、社員食堂はどうなった」と言うと彼は、「少しは責任を感じてくれよ」と言った。詳しく話を聞くと外部委託の会社と、私があまり旨くはないなと言ったことを踏まえで話し合いをしたところ、へそを曲げられて、今後一切クレームを付けないと約束しなければ契約の切れる三か月後の再契約をしないと脅されたと言う。その返事を二週間後にしなければならぬのだと言う。ほかの外部委託先を探したが、同業

者同士、横の連絡もあって困っていると言われた。私は以前のようにT物産が直接経営する道はないのかと尋ねると、「それも考えたが賄いのパートは手当てでできるが、ある程度、経験のある責任者を探すのが難しく、運営と調理に実績のある人物はそう簡単には見つからないし。時間的な余裕もない。切り替えも二か月後に迫った夏休みの一週間しか無い状況だ。恐らく条件を呑んで再契約をしなければならぬだろう」と言われた。私は心当たりがあるのだがと、水を向けると、面接するから連れて来いと言われた。

金田健一が務めるカレー屋に偶然を装い入った。カウンター
の奥にいた彼は私に気づかなかったが「金田君」と声を掛けると「先生」と返事が返ってきた。丁度。一時間ほど休憩時間があると言うので喫茶店でコーヒーを飲みながら頃合いを見てT物産の社員食堂の件を話した。彼は、「私などがと」
言っていたが、私が「面接だけでも受けてみなさい」と半ば強制的に話すと彼も「面接だけなら」と承諾した。その場からT物産のY君に電話して面接の段取りを付けた。二日後、Y君から「腹を決めた」「金田君に任せてみる」「すでに取締

役会で決定した」このことは金田君にも連絡済みであることを知らせてきた。続けざまに金田君からお礼と同様な内容の説明があった。私は、「大変だろうがS島の家族の為にも頑張れと」励ました。S島の奥さんには連絡したそうで、私がおぜん立てしたことを理解していた。

これでとりあえず鈴木裕君の娘、雅子の問題だけが残った。私は妹のU大学を訪ねた。家でも妹との話はできたが、妹には雅子にたいして先入観を与えたくなかったので詳細は話さず、たまたま教え子の娘が在学中という事で、食事でもと立ち寄ったことにしてくれと頼んだ。研究室を訪ねると妹は授業中という事で三十分ほど待たされることに、すると研究室の奥から視線を感じた。視線の先には白衣を着た女性がこちらを凝視していた。しばらく間があつて「失礼ですが滝田先生では」と声を掛けられた。私は「以前は」と答えた。すると「私ですよ」「山田花子」ですと言った。間違はなく教え子の山田花子だった。「花ちゃん」と言って慌てて「山田さん」と言い直した。教え子時代山田花子は同級生から「花ちゃん」と愛称で呼ばれていたので授業中に「では花ちゃん答

えて」と言ったところ放課後職員室に来た山田花子に、姓で呼んでくださいと猛烈な抗議をされたことがあった。話を聞くと面会者の名前が東郷となっていたので、一目で滝田先生だと直感したが直ぐに声を掛けられなかったと言った。鈴木裕君の娘だけでなく山田花子まで妹と関係があるのは不思議な気がした。そこへ妹が授業から帰ってきた。山田花子を交えて不思議な縁で盛り上がった。そこへ鈴木の花、雅子が研究室に入ってきた。あらかじめ妹には教え子の娘だとだけは話しておいたので面会をセットして貰っていた。山田花子は「そう健ちゃんの娘さんだったの」「S島出身と聞いていればすぐにわかったのに」と言うと雅子はすまなそうに下を向いていた。私は山田花子と鈴木雅子を伴って大学を後にした。静かに話ができるよう個室のレストランを予約していた。山田花子には母親役として聞いてほしいと言うと照れたように「まだ独身です」と小さな声で言った。続けて「滝田先生は私の初恋です」とも言った。「女も四十を過ぎると図々しくなるな」と言うと「本当に初恋です」と強く言った。この会話でいくらか雅子も気が楽になったようだった。私は、

S島に行ってお父さんの再婚の話聞いたと言い。自分の家もまた同様のケースであり教師を断念した経緯や母方から父親の姓になったことや現在の家庭環境、また妻と娘を亡くしたことなどを話した。山田花子はハンカチを取り出ししていた。私はたかだか五十年の人生だが今になって考えれば親子は何年たっても親子であり、現実から逃げても何の解決にもならない。少しでも輪の中に身を置くことも考えるべきではないかと言った。

大学を卒業後、将来の目標に教員を考えていた鈴木雅子は、たった三年間だけだが教師生活を送った私の話には共感を覚えてくれたようだった。そして今度の夏休みには岡山の父親のもとに帰れるように気持ちを整理したいと語った。山田花子には雅子のことを頼んだ。花子からは、お宅にお邪魔してもよろしいですかと言われた。そして「なにしろ私は滝田教授と東郷先生お二人の教え子ですから」と笑って言った。私は「どうぞ山田准教授先生」と答えた。これで私は村上君と山田花子と二人のブレインを持つことになった。

週末、早速山田花子が訪ねてきた。私は残りの生徒たちの

資料を整理していた。花子はそれを見て、去年、恵子に会ったと言った。多田恵子、クラスで一番の美少女だと男子生徒の間では言われていた。と言ってもクラスに女子は六人しかいなかったが。花子が昨年、静岡で行われた学会のオープニングセレモニーで県会議員の夫と多田恵子は参加していた。懐かしさのあまり声を掛けたがセレモニー会場という制約もあって挨拶を交わしただけだった。だいぶ疲れているようにも見えたし、夫の態度もやさしさが感じられなかったと少し怒ったように話した。そして夫の名前が高田清吉と記憶していた。県議員となれば調べるのは容易だった。高田清吉はもともと静岡のK電機で労働組合の委員長から県会に出たM党所属の議員で多田恵子が同じK電気に就職したことで同僚だった高田清吉と結婚していた。夫が県会議員なので経済的には問題が無いとも思い、関わらに済まそうと思っただが、花子が抱いた高田清吉への印象があまりよくなかったことと恵子が疲れているように見えたと言う事が気になり、二人の夫婦関係を含む家庭環境を調べることにした。県議員という立場上、家庭内のことはなかなか外にでなかったが、

興信所の調査員は、半年前まで高田家のお手伝いをしていたという女性を突き止めた。多少の経費は掛かったが、家庭内のことが詳しく分かった。お手伝いの話とそのほかで調べた情報を総合すると次のようなことだった。二人が結婚して五年ほどは仲の良い夫婦だったが夫の清吉が労働組合の役員になってから生活が派手になり、帰宅も深夜に及ぶことも多く夫婦仲も冷えてきた。そして県会議員に当選すると、愛人のところに入り浸るようになり、家庭でも暴力をふるうこともあると言う。流石に恵子も我慢できなくなり離婚を切り出すと、議員の立場上、絶対離婚はしないと応じない。それに半年後には選挙もあり今、離婚ともなれば出身母体のK電気の支持を失うことになる。特に恵子は組合員の奥さんたちに絶大な信用があり離婚などんでもないことだった。形だけでも愛人と手を切ったように見せていたが、実際は続いていることを確認したと報告書には書かれていた。高校三年の息子と中学二年の娘がいることも家を出る障害になっているという。私は、怒りに震える自分を抑えるのに必死だった。

山田花子に恵子の意思を確認してくれるように頼んだ。恵

子は「教授に聞いたのですが、先生はJGグループのトップなのですか」と聞いてきた。私は「相談役という立場だが、それなりに影響力は持っている」と答えた。「先生は、私に兄が二人いるのを覚えていますか」「その兄二人がJGグループの社員になっていきます」「部長と課長なのですが、一つずつ役職を上げてください」と言った。私は思い出していた普段は「花ちゃん」と呼ばれていたが彼女には「チャツカリ屋さん」と異名があったことを。私は一言「むりだよ」と答えたが、心がけておくと付け加えた。それが効いたのが静岡の恵子のところまで話を聞きに行ってくれた。恵子は花子に「子供たちには一緒に家を出ると言われているので、今すぐにも家を出て離婚したいが、S島に戻ると両親や兄夫婦に迷惑が掛かるので、実行に移せない」と訴えたと、戻った花子は私に言った。私は村上に高田清吉のすべてを調べるように指示をした。特に政治家としての立場や所属グループなど念入りにと付け加えた。静岡の河口湖には東郷家の別荘があった。そこなら二人の子どもも学校に通えるし、学校も後ひと月で夏休みとなる。高田清吉は金曜日には、ほとんど家に帰ら

ないとの事なので明日の金曜日に引越す段取りを付けた。土曜の昼頃帰宅した高田清吉は、もぬけの殻になった家で放心状態だった。一方、私は高田清吉に引導を渡す為、静岡選出のM党の加藤代議士と、同じくM党の代議士だが党の幹事長をしている金丸氏に会っていた。もともと金丸代議士はJGグループの労働組合が支持母体で、私とも面識があった。私は詳しい話は避けるが、県会議員の高田清吉はゲスな男なので、県議員にはふさわしくない。しかるべき処置をお願いしたいと頭を下げた。金丸代議士は「判りましたと」答えて隣にいた加藤代議士に「異論はないね」と言った。加藤代議士は「ハイ」とだけ答えた。高田清吉は、選挙も近いので、妻と子供は祖父が入院したので出かけていると周囲にはとり繕っていた。そこへ秘書から今度の県会選挙は隣町のMK電子の労組委員長がM党から出馬すると言う噂が流れていますがご存知ですかと言われた。高田は「誰がそんなデマを」と取り合わなかった。しかしM党の選挙対策委員会に高田清吉は呼ばれなかった。高田は血相を変えて加藤事務所に向かった。

加藤は「今回、君には遠慮してもらいたい」「なにしろ悪い
うわさが多すぎて庇い切れない」と言った。そして「恐ろ
しい相手の逆鱗に触れたな」と言っつて高田を残し、席を立っ
た。

すこすごと家に戻ると裁判所から、離婚調停の書類が届いて
いた。愛人も金の切れ目が縁の切れ目とばかり、高田が借り
ていたマンションから姿を消した。

高田は、学校帰りの長男の後をつけ、恵子がいる東郷家の別
荘を突き止めていた。別荘には警備の為、ガードマン二人が
詰めていた。無理やり入り込もうとしているとの連絡を受け
た私は、弁護士に連絡するとともに急いで別荘に駆けつけた。
玄関で押し問答をしている高田を私は、家の中にいれた。高
田は私と恵子が不倫関係だと思い込んでいた。

高飛車に出る高田を私は一喝した。恵子は私が恩師であるこ
とを説明し、改めて早期の離婚を求めたが応じようとはしな
かった。そこへ恵子側の弁護士が入ってきた。弁護士は高田
の愛人の供述書を示し、裁判となれば高田の一方的な敗訴と
なり、慰謝料など大きく不利な立場になること説明した。高

田は涙を浮かべて復縁を懇願した。恵子は少し心を動かされたようだが、二人の子供は、離婚を強く主張した。それを聞いて高田も観念して離婚に応じた。慰謝料として自宅を恵子に渡し自分は実家に戻ることで話は決着した。残りは恵子の生活を確立するために就職先を見つけなければならなかった。村上に調べさせたところ、恵子の自宅から車で三十分の所にJGグループの財団が運営する美術館があった。財団の理事長に連絡したところ二か月後に定年退職者出ることになった。補充を考えているところだと返答を受けた。恵子の履歴を見ると高田が県会議員に初当選した後、市立美術館に三年ほど勤めていた。恵子に聞くと夫が選挙絡みで、市の労働組合から支持を取り付けるために、素人だった私を市の職員にしたと答えた。私は、仕事はどうだったと聞くと、もともと恵子は絵が好きで充実した三年間だったが、二期目の選挙の為に辞めさせられたと言う。二か月後から多田恵子としてJG美術館の職員となる。ここまで生徒十四人中男子生徒七人中四人、女子生徒六人中二人の消息が判明している。どうしても女生徒は結婚で名前が変わるため消息を知るの

が難しいのは仕方がなかった。そして消息の判らない生徒達は、すでにS島とは縁が切れていた。山田花子にこのことを言うと「本当に先生なのに世情に疎いですね」と笑っていた。そして「簡単なことですよ」と言った。私は訳が分からなかった。すると「先祖代々のお墓は簡単には移動できませんよ」「島のお寺に行けば過去帳にはお墓の継承者の連絡先が書かれているはずです」と言った。加えて「お寺の現在の住職は山田家の親戚なので、訳を話せば教えてくれます」。言われてみればその通りだった。

早速、S島の正慶寺を花子と尋ねた。すでに話は済んでいて八人のうち七人の連絡先がピックアップされていた。ただ加納弥生だけが連絡先が不明だった。住職によると、加納家は、十五、六年前から音信不通になり先代の住職によって無縁仏扱いになっていると言う。現在の住職は五年前に先代の住職が亡くなり。丁度、役所を定年退職した花子の親戚である山田武雄が住職の資格を取って現在に至っていた。住職を含め雑談をしていると奥から住職の奥さんが出てきて「F町の竹田さんも同級生だったかね」と花子に声を掛けた。そし

て住職に「あなたも耄碌したわね」と言い。「三日後に竹田家の法事を頼まれているでしょ」と笑って言った。住職は「そうだった」「確か施主は竹田雄一だった。父親の十三回忌の法要を頼まれていた」と照れ笑いを浮かべながら話した。花子は「じゃあ雄ちゃんがS島にくるのね」と私に向かって言った。神戸に戻ってまた来るのは面倒だったので、S島のホテルに泊まることにした。花子は明日帰ってまた出直すと言う。その夜は花子とホテルのバーで飲むことになった。私は、「なぜ結婚しなかったの」花子に尋ねた。花子は「縁がなかったの」そして酒の勢いか「初恋相手の先生が忘れられなかったのかも」と意味深なことを言った。後でそのことを妹に話すと、実際は、妹が知っている話だと研究室の助手時代にエリートサラリーマンの彼氏がいたが、彼にニューヨーク勤務の辞令が出て別れたらしい。彼は結婚して一緒にニューヨークに行く行ってほしいと懇願したらしいが、花子は好きな研究を諦めてまで彼についていく決心が出来なかったと聞いたと妹は私に語った。私は、独身の妹を見ているだけにそんなに魅力がある世界なのかと言うと。妹は「あるほんの一部

の人種にわね」と結んだ。

私は、山田花子そして村上純と岡部誠一とフェリー乗り場にいた。もちろん竹田雄一を迎えるためである。

竹田雄一は妻と五人の子供を引き連れてタラップから降りてきた。すでに大阪に住む竹田君には連絡を入れておいた。岡部は奥さんの姿を見て、竹田の耳元で六人目かと言った。竹田は苦笑いをしながらうなずいた。竹田君とは法事が済み次第、S島で一軒だけある料亭に来てもらうことにした。

妻と子供をホテルに残し、竹田君が駆けつけてきた。彼は準大手の旅行会社の営業マンで業者間の競争が激しくて大変らしかった。その席で竹田君は松本幸子に東京で会ったと言った。月に一度は東京の本社に行くのだが、たまたま同僚と入った池袋のバーに松本幸子はママとして居た。化粧の為、気が付かなかったが、名刺を求められたので渡すと、「やっぱり雄ちゃんだった」と言われた。そういわれて松本幸子と判った。そして「同級生と言わないで、歳がバレルから」と営業笑いをしたと言う。十分ほど話したが、すぐにどこかの会社の重役風の中年男が店に入ってくると竹田の所には戻

らなかった。「あれはパトロンだな」と竹田は言った。竹田から店の名前を聞いた私は一度訪ねてみようと思った。

毎週のように花子が神戸の自宅に訪ねてくる。私がまた来たのかと言うと。ニュースを持ってきたと言う。花子の二番目の兄、山田賢二から「山本保て」花子の中学時代の同級生かと電話してきたと言うのである。花子の二番目の兄は、JGグループのカード会社であるJGカードの社員だと花子から聞いていた。その兄の話だとそのJGカードはKSカードを去年吸収合併した。そのKSカードの社員の中に山本保がいて、今月の移動で賢二の課に配属になったと言う事だった。私は、その合併の承認を与えたのでよく覚えていた。いきなり「花ちゃんのお兄さんですか」と尋ねられて、話を聞くと妹の花子と同級生だと言うので、確認の連絡だった。お寺の過去帳の記録によれば山本家の連絡先は保の伯父の奥さんになっていて、どのように連絡をとるか考えていた最中だった。今の世の中は、個人情報保護法との絡みや詐欺の電話も多く、直接訪ねる以外ないとは思っていた。

私は月に一度開催されるJGグループの昼食会の為、東京に

いた。午後はT物産のY常務に金田健一の状況を聞いた。Y常務によると想像以上に金田は有能で、まだ社員食堂の経営切り替えまで三週間もあるのにほとんど準備作業は終わっており、現在は新規に入ったパートの教育に当たっていると言い感謝もされた。

夜、池袋にある松本幸子のバーに行った。時間が早いせいかママである幸子はまだ店には出勤していなかった。私はホステスにそれとなく幸子のパトロンを探った。名前は教えてもらえなかったが大手証券会社の役員という事までは聞き出した。しばらくすると松本幸子が顔を出した。私を見ると「雄ちゃんにお聞きになったのね」「おしゃべりね」と言った。

私は「よく覚えていたね」と言うと「この道十年でお客様の顔を覚えるのが商売ですから」と答えた。私は包み隠さず生徒から縁遠くなった理由を説明し詫びた。もちろんJGグループの話はしなかった。幸子は大学卒業後大手の証券会社のOLとなり三十一歳の時にこの店を開いたと言った。「先生には歳をゴマかしようがないから」と笑った。次々とお客が入ってくるので「ごゆっくりしていらっしやって」「今日は

私のおごりです」「次回からはキツチリいただきますから」と言って他のお客に挨拶に行った。三十分ほど飲んで席を立つとうとしたら、隣にいたホステスが私に目配せをした。丁度五十代ぐらいか中年の紳士が入ってきた。幸子は直ぐにその紳士のテーブルに向かった。私は席を立つのをやめて二人の観察を始めた。するとその視線に気が付いたのか、幸子が恩師だと説明したのかわからなかったが、私の席に近づいてきた。おもむろに「東郷相談役ですか」と名刺を差し出した。その名刺には「JG証券常務 杉山武士」と印刷されていた。私は、名刺を持ち合わせ言いませんので失礼と言い、確かに東郷ですが、プライベートなのでと少し語気を強めて言った。杉山は少し驚いた様子だったが、すぐに松本幸子が飛んできた。「ここはプライベートの所なので、野暮なことしないで」と杉山に言った。「失礼します」と杉山は頭を下げて席に戻った。それに合わせて私も席を立った。幸子が見送りに店の外まで来たので、「大事なお客に不快感を与えてしまった」「私が申し訳なかったと言っていたと伝えてくれ」と言い。私の携帯番号を教え、また来ると言い残してタクシーに乗っ

た。翌日、私の携帯に松本幸子から電話があった。

杉山から聞いたのであろう。杉山のことを擁護し責めないでくださいとの内容だった。村上に杉山を調べるように頼んだ。同じグループ内のことなのですぐに身上調査は終わった。

杉山武士 五十三歳 JG証券常務取締役 去年長い闘病生活をしてきた妻を亡くしていた。子供はいない。その妻は、

JG証券会長の娘で実兄はJG証券現社長の島田元太郎。松本幸子はJG証券の前身、東京共同証券に大学卒業後神田支店に就職。同時期杉山は同支店副支店長。

典型的な不倫で間違いなく松本幸子は杉山の愛人だろうと村上は言った。村上によると松本幸子は、県内の女子高ではトップの進学校に入学し、大学もストレートで一流大学に進学をしていた。確かに私が覚えている中学生の松本幸子は成績も優秀だったが正義感も強く品行方正を絵にかいたような生徒だった。お節介かもしれないがこのままにはしておけないと思った。

本社の相談役室にアメリカでJG物産常務取締役兼アメリカ支店長をしていた時の元部下で現在、JG物産本社の総務

部長をしている前田を呼んだ。JGでは海外出張などの手配をすべて大手旅行代理店〇社に委託していた。前田は常々、費用の割にホテルのグレードが低いとかボツタクリなどと酒の席で文句を言っていた。彼の現在の立場は大手旅行代理店への発注窓口であり現状を聞いた。前田に言わせると確かにマージンが高いと感じると言う。競争相手がいないのが原因だとも言った。私はなぜ独占的に委託しているのかと尋ねると現在JG物産の専務をしている石田専務が総務部長時代に二社体制から一社にして以来そのままの体制が続いている、前田も専務の手前、手が出せないと言う。私は竹田雄一の名刺を渡し、使えるかどうか検討してくれと言った。石田専務からクレームがいたら私の指示だと言って、私に直接話すように言ってくれと話した。

昼間に松本幸子と会う約束を取り付けた。夜に会う幸子と違い普通のおばさんという姿だった。私は、杉山との関係はある程度知っていると話し、なぜ君がそういう生き方を選んだのかと問うた。幸子は、恋は魔物と言いますけれど、彼が好きになってしまいましたとだけ答えた。昨年、彼は奥さんを

亡くしているのに、結婚は考えていないの？と言うと。彼は、決断がつかないみたいです。と答えた。その理由はと再び問うと、よくわかりませんが、会社の事情だと思います。か細い声で言った。私は、JG証券の会長と社長がネックなのだろうと推測した。そして私は、杉山からJGグループでの私の立場を聞いているかと尋ねた。幸子は「先生がJGグループオーナー一族だと聞きました」と答えた。私は少し姿勢を正して、松本は彼と結婚したいのかと単刀直入に尋ねた。幸子は短く「ハイ」と答えた。

JG証券の杉山常務は、戦々恐々としていた。JGグループの東郷芳雄がまさか松本幸子の恩師だとは……幸子の店での東郷は、確かに杉山自身に対して怒っているように感じられた。あの態度から、幸子との関係を知られているのは間違いないと思われた。その東郷芳雄が会いたいと言ってきた、恐れない方がおかしかった。東郷は杉山と顔を合わせるや否や、「私の訪問の意味がお判りですか」言った。間髪入れずに「判っております」「申し訳ありません」と杉山常務は答えた。私は「それではどのような決着をつけるつ

もりですか」と再度尋ねた。「別れます」と杉山は言った。私は「それは困る」と応じた。続けて「松本は貴方が好きで結婚したいと言っている」「貴方にその意思はないのですか」杉山は「私も彼女には大変苦勞を掛けていますし愛してもいますが、まだ妻が亡くなって一年半しかたっておらず妻の家族にも申し訳ないので」と言い訳をした。私は「JG証券の島田会長や義兄にあたる島田社長の件も承知しています」「私に任せてもらえますか」と尋ねた。杉山常務は「お願いいたします」と答えた。

竹田雄一は、JG物産の総務から連絡があったことに驚いていた。JGは大手旅行代理店〇社の牙城で、同業他社がいくらアプローチを掛けても話すら聞いてもらえないと業界で評判だった。恐る恐る訪問すると、出てきた前田総務部長は、竹田の高校時代に所属していたテニス部の二年先輩だった。お互い、驚いたが「前田先輩、竹田」と呼び合うのに時間がかからなかった。前田はJG物産が毎年行っている入社十年目の社員の中から選抜された二十名の三週間ロンドンの金融街シテイ研修の見積もりを依頼した。当然、〇社との

相見積であることを説明した。竹田は「前田先輩は、私のことをご存知だったのですか」と聞くと「総務部長だが君の会社に仕事を回す権限はないよ」と自嘲気味に言った。そして「君のコネはJGのジョーカーだよ」と言った。

私は山田花子を呼び出していた。松本幸子の件を相談する為である。果たして二人を結婚させることが幸子にとって良いことなのか今一つ自信がなかった。今までの幸子や杉山との会話を告げると花子は「幸子自身が結婚したいと言っているのならそうしてあげるべきです」と言った。そして「幸子も結婚すると寂しいな」と私を見上げて言った。

もともとJG証券は、東京共同証券と言って島田家がオーナーだった独立系の証券会社だったが十数年前の証券大不況の折にJG参加になった会社でJGグループの中でも支配を受けにくい会社だった。私も島田会長がかなり年長という事もあって、丁重に話を持ち掛けなければならなかった。JG証券では私の訪問の為、島田会長親子が待機していた。私は「今日は会長にご相談があつて参りましたと」話し始めた。話の内容は、JG証券の杉山常務とは頻繁に銀座のバー

で顔を合わせることから親しくなった。話をするうちに奥さんを亡くされて独身だと聞いたので、私にも結婚相手を探している四十一歳の女性がいる。その子は教師をしていた時の教え子なので何とか結婚させたいのです。杉山常務にその話を持ち掛けたところ、まだ奥さんが亡くなって一年半しかたっておらず、妻は島田会長の娘さんだったと聞いたので、ご了承を得られるかと思い参上したと説明した。もちろん杉山常務にも口裏を合わせるよう話してあった。島田会長もJGグループのトップから話が有った以上、断るわけにはいかなかった。島田会長は「娘も長く病気療養が続いて杉山君にも面倒を掛けていたので、いい人がいればと島田家としても考えていたと」応じた。

数日後、松本幸子から電話があった。杉山からプロポーズして貰ったと言うお礼の電話だった。その電話の中で幸子は「村上の純ちゃんから聞きましたが、同級生の消息を調べているようですが、川島清治君の消息は分かっていますか」と言われた。私が「知っているの」と問いかけると「現在の消息は判らないが店に来たことがあります」と言った。早速、

村上に松本幸子の元へ行ってもらった。その間、私はJGカード株式会社を訪ねた。もちろん山本保に会うためである。受付で面会を頼んだが、就業中は約束が無ければ面会できないと言われた。そこへJGカードの中村社長が通りかかった。目ざとく私を見つけた中村社長は最敬礼で「なにか当社に御用が」と言った。私は、「教師時代の教え子が、中村さんの会社でお世話になっていると聞いたものだから会いに来ました」と話すとそばにいた秘書にすぐ山本を応接室に呼ぶように命じ、自ら応接室に私を案内した。

中学生の頃の山本は痩せていて「骨川筋衛門」というあだ名がついたが、あまりにも露骨なあだ名だったので、私が禁止したことがあった。その後は「たもちゃん」に落ち着いた。大汗をかきながら太めの体をゆすって彼は現れた。「滝田先生ご無沙汰しています」と興奮した声で話した。そこへ中村社長が様子をうかがいに来た。そして山本に向かって「お昼も近いし積もるお話も有るだろうから外出してそのまま直帰して構わないと言った」山本は相手が社長なので当惑していた。私は「中村さん申し訳ありません」と彼を連れ出した。

山本は「先生は社長とお知合いですか」と尋ねた。私は「個人的にはあまりよくは知らないが顔なじみではある」と答えた。山本は妻と子供二人の家庭で、特に生活に問題は無いらしい。今までの生徒達はいずれも悩みを抱えていたが、山本は無縁のようだった。いずれ同窓会をするつもりなのでその時は是非、参加するように言って別れたが。昼食代は彼が払うと言って聞かなかった。翌日、私はJGカードの中村社長にお礼の電話を入れた。そしてJGカードには縁があると言った。山本君だけでなくやはり教え子山田花子の兄二人がお世話になっています。と二人の名前を言った。これで三人の扱いが多少変わること期待して。上場会社の役員となれば阿吽の呼吸で相手の意をくむ訓練ができています。山田花子の話では、二人の兄と山本が社長から飲み誘われたとの報告があった。

村上が幸子から川島清治の話聞いてきた。村上の話要約すると、川島清治は幸子が店を開いた直後、どこで知ったのかわからないが、バンド仲間を連れて店に来てくれた。当時、川島はクラリネット奏者だった。その後、二、三度店に

来たが九年ぐらい前からぶつり姿を見せなくなった。その後バンド仲間が店に来た時に川島君の消息を聞いたところ不祥事を起こして都落ちをしたと聞いた。バンドの名前は、ブルジョエルスターと言っていた。そのバンドはまだ現役で、時たまテレビでも名前を聞くことがあるとも言っていた。私は川島君が中学校時代に音楽の武田先生からクラリネットを個人的に習っていたことを思い出していた。武田先生は音大生の頃、新進気鋭の女性クラリネット奏者だった。理由は不明だがプロにならず教師の道を選んでいた。村上の調査で徐々に不祥事の内容が判ってきた。九年ほど前に当時売出し中の女性歌手とのスキヤンダルだった。その女性歌手を妊娠させたことで、女性歌手が所属していた大手プロダクションの社長が激怒して、女性歌手に中絶と川島清治との別れを強要したが、二人は頑として首を縦に振らず。芸能界から追放された。その女性歌手は武田先生の姪にあたり現在は生まれ子供を武田先生に預け、川島君がマネージャーとなつて地方回りをしている。もちろん二人は結婚している。金井夏子という芸名の女性歌手は実力派の歌手として現在でも

一定のファンがいると言う。村上もデビュー当時の金井夏子のCDを持っていた。私は、アメリカ在住時代で知らなかったが、そのCDを聞くと声量も豊かで聞きほれるほどの清涼感に包まれた。音大で声楽を専攻していたと聞き終わると村上が言った。それほどの実力があっても九年前に所属していた大手プロダクションの影響力が残っていて活躍の場は限られていた。私は、村上にJG物産の広報課と接触するように命じた。金井夏子を再び表舞台に立たせる為に。実質的なJGのオーナーの意向となれば総力を挙げて復帰のスケジュールが検討された。問題は障害となる大手プロダクションの意向だったが、JG物産の広報課は直接、各テレビ局の営業と接触した。JG物産を含めJGグループ全体では年間百億近い広告宣伝費を使っている。JGという大手のスポンサーを無視することはできない。まずJGカードのCMに金井夏子の曲を使用することが決まった。川島清治は驚いていた。大手CM会社から曲の使用を求められたからだ。その後、頻繁に地方のラジオ局やテレビ局から出演依頼が来るようになり。とうとう在京のテレビ局からも出演依頼が舞い込ん

だ。金井夏子が歌うJGカードのCM曲が話題になり、女性週刊誌にも川島との純愛が報道され、金井夏子が所属していた大手プロダクションの当時の対応が非難の的となり始めた。そして金井夏子は一躍、時の人となった。大手プロダクションは非難を避けるためにも川島が設立した芸能プロダクションとの提携を図った。川島は全ての発端にJGグループのバックアップがあつたことを突き止めていた。そして村上にたどり着いた。村上も私の存在を明かさないわけにもいかず、私は二十六年ぶりに川島と対面した。川島は武田先生と妻子を連れてきていた。私は武田先生にご無沙汰を詫びると共に川島清治にも不義理を詫びた。川島夫婦は、苦労の連続だった九年間を思い出したのか、涙ぐみながら感謝の言葉を並べた。私は、金井夏子の後援会長となった。二十八の瞳も残り八の瞳になった。女子生徒が三人、男子生徒が一人。女子生徒の加納弥生の他は、お寺の過去帳から親戚あるいは親の連絡先が判っている。ただ石井家の墓はS島にはなく石井めぐみの母方のお墓で野島家の墓しかなかった。

石井めぐみの両親には、担任だったころ何度か家庭訪問などで会ったことはあるが、すでに四半世紀前の話であり突然訪ねても取り合ってはもらえないと思っていた。幸い山田花子と石井めぐみは母親同士が同級生だったことで双方の家を行き来する仲だった。石井家がS島を離れたことや花子が神戸の大学に進学したことで連絡が途絶えていた。しかし石井めぐみの両親も相手が花子であれば消息を教えてくれると思ひ花子に石井めぐみの両親が済む九州の熊本を訪ねてもらうことにした。丁度、花子は二日後に熊本で開かれる学会に参加する予定があったことも理由の一つだったが。

村上が須藤良明君の消息を求めて新潟に飛んでいた。しかし須藤家は空き家になっていて、近所の人の話だとここに住んでいた時は両親と大学を中退してフリーター暮らしの須藤良明君の三人暮らしだったが、父親が亡くなって七、八年前にS島に戻ると言って新潟を離れていた。村上の話だと須藤君には二人の姉がいて、中学の頃は、一番上の姉は既に嫁ぎ、二番目の姉は神戸の大学に進学したはずだと記憶していた。念のためS島の中学校に照会したところ須藤君の二番目の

姉の名前は、和子という事が判った。ただ神戸の女子大学と
いうだけで大学名までは覚えていなかった。母親に二十五年
前の神戸での大学事情を聴いたところ母の大学も二十年前
までは女子大で、それから男女共学の総合大学に発展したの
だと言う。母は「なんでそんな話を」と尋ねるので、須藤君
の姉のことを話した。すると母は「その須藤さんという方は、
S島出身なの」と聞いてきた。そして須藤和子さんも確かS
島出身だったわとつぶやいた。「貴方も覚えていない芳雄が
大学生の頃よく家に入りに入っていた和子さんを」当時、母親
の助手をしていて和子さんと呼ばれていた綺麗な女性がい
たことを覚えていた。母の話だととても優秀な女性で、数年
間、母の研究室にいたが、アメリカの大学からの誘いで留学
をした。「十数年前に帰国したときに挨拶に来たけど結婚し
て小野という姓になっていたわね」「東京のJ大学の教授に
なったはずよ」と教えてくれた。調べると確かに小野和子と
いう教授が在籍していた。

私は、熊本から山田花子が戻るのを待って、東京のJ大学を
訪ねるつもりで、母に小野和子教授とのアポを取ってもらっ

た。

山田花子が神戸に戻ってきた。花子の話だと石井めぐみの家は地元の名士の家でそこにはめぐみの母と弟夫婦が暮らしていた。母親の話だとこの家はもともと夫の実家で、夫は家を出で、S島で結婚したことで養子ではないが、熊本には帰らない約束だったが、実家を継いでいた兄夫婦が相次いで亡くなり一人母親が残されたので一家で熊本に戻った。しかしその母親と夫も亡くなって息子夫婦と暮らしているがいずれは先祖の眠るS島に帰りたいたいと言っていた。肝心の石井めぐみは大手商事会社B社の社員と結婚して、田所めぐみとなり、その夫の田所がドイツの駐在員になったのを機に三年前からドイツで子供二人と生活をしているとの事だったが、三年の任期の切れる来月帰国すると弟にメールしてきたということだった。帰国後の任地は恐らく東京になるとも連絡してきていた。

翌日、新幹線で東京のJ大学に向かった。小野和子教授に会うためである。母からの連絡もあってスムーズに面会が出来た。「先生はお元気」と言った後、「私も老いたけど芳雄さん

も貫禄が付いたわね」と開口一番言われた。聞くと小野教授もあと数年で定年らしい。私は、S島で三年間、弟さんの担任をしていたことを話し、当時の教え子たちの消息を訪ねていることを話した。小野教授は不思議なめぐりあわせに驚いていたが、弟の良明は沖繩の水族館に勤めていると言った。

私は良明君が新潟からS島に母親と一緒に帰ると聞いていたと言うと、教授は、確かにS島に帰ると言って、姉である私の所に寄ったのだが、母の体調がよくなり、東京で面倒を見ることにして、弟はたまたま沖繩の水族館に職が見つかり、元来、生き物好きだったので単身沖繩に行った。五年ほど前に同じ飼育員の同僚と結婚した。そして「なぜ新潟へ」と教授に問われた。私は、お寺の住職から聞いたと答えると、「母は、お寺には東京の住所を連絡した」と言っていたが。もう九十だからねと悲しそうな表情を浮かべた。そして沖繩の職場と自宅の住所を書いてくれた。これでとりあえずまだ消息が掴めないのは田中由美子と加納弥生の二人だけになった。

村上君が「S・T・Iプラス二十八」を始めたと言ってきた。なんのことだと聞くとSはS島、Iは母校である高島中学、

さして次のTは滝田先生のT最後の二十八は瞳だと言う。同級生のうち三人はインターネットを利用したことがなかったが、何とかメールの送受信ができるように教育したと言った。私は毎日パソコンの前に座るのが日課になった。

金田澄子(旧姓河合)から初めてのメールが配信されてきた。村上君の話だと、教育するのに一番手間がかかったと言う金田澄子のデビューメールだった。内容は昨晚のテレビに田中由美子が出ていたとの内容だった。旅番組で、長野県の白骨温泉にゲストが泊るシーンがあり由美子はその旅館の若女将としてテレビ画面に映っていたという。そのメールに対してすぐに山本保から返信があった。みんなで由美子の温泉に行こうとの話だった。「私は、君は仕事中だろうと」返信したが、返事は帰ってこなかった。結局、週末に私と六人の教え子で由美子が若女将をしている温泉に行くことになった。驚かしてやろうと言う山本君の発案で、「ST・Tプラス二十八」という名称で予約した。村上のもとに熊本の石井めぐみの母からめぐみが子供二人を連れて予定より一月も早く帰国すると国際電話があり、村上さんのことを話したと言っ

てきた。昨日、田所めぐみ（旧姓石井）から村上の所に熊本から連絡があり、田中由美子に会いに白骨温泉に行く予定だと告げると、子供を母親に預けて参加したいと言ってきたと言う。村上の話によると中学時代石井めぐみと田中由美子は親友だった。

新宿駅に集合した我々は、チャーターしたマイクロバスに乗り込み白骨温泉に向かった。

田中美奈子が若女将をしている旅館に着くと、若女将が出迎えに来ていた。私は皆の中ほどに居たが、その前に石井めぐみがいた「めぐみ」と美奈子が声を掛けた。すぐに後ろにいた私にも気が付いて「滝田先生も」と言い。皆の顔を見回した。この集団が同級生達だと確認すると、すぐに若女将の顔に戻った。その夜の宴会は、昔話に花が咲き、深夜まで及んだ。気になったのはめぐみが涙を浮かべて美奈子と話していたことだった。翌日、めぐみは何ともない様子だったが、私は美奈子に呼ばれて帳場に入った。美奈子の話だとめぐみがドイツに居る夫と離婚すると言う。原因は夫の浮気だと言うが今一つはつきりしないが、ドイツには置手紙をして日本

に帰ってきていた。夫からの電話に出ないと、夫の母親が会いたいと言って明後日、東京のホテルで会うのですが、気後れしているようなので、先生に立ち会ってもらいたいとの願いだった。最初は美奈子が頼まれたらしいが、明日、明後日と団体客の予約が入っていて動きが取れないので、先生に頼んであげると返事をした。私は、快く同席を約束した。

約束のホテルの一室で私とめぐみが続いていると、姑とめぐみの夫の兄が入ってきた。めぐみは私を中学の恩師だと紹介した。相手は他人が同席することに警戒していたが、めぐみが父親代わりの方と言ったので話し合いが始まった。姑の話だとドイツに居る息子は浮気などしていないと言っている。続けて、たとえ浮気をしたとしても男には一時の気の迷いみたいなことがある。かりにも父親は一部上場会社JG生命の代表取締役社長の地位にあるので、離婚ともなればゴシップ記事にならないとも限らないので、絶対に離婚は認められないと言った。私はJGの名前が出たので、戸惑ったが「父親の田所さんも同じ意見ですか」と尋ねた。それには答えず、隣にいた息子に一瞥を与え。この子も総務大臣秘書として長

いので、大臣から次期総選挙に出馬を進められているので、弟の離婚は足を引っ張ることになると、まるでめぐみが悪いような口ぶりだった。めぐみは黙って聞いていたが、私は「田所家の意向はよくわかりましたので、めぐみの夫が帰国したら再度話し合いましたよ」と言ってみぐみと席を立った。

めぐみは激怒していた。「あのマザコン夫とは絶対別れる」と何回も繰り返した。もともと石井めぐみは勝気な子で、中学生の頃は私も手を焼かされた。「夫もサラリーマンなので勝手に帰国はできないので」「帰国する一月後まで熊本の本所に子供といます」そして夫との話し合いにも同席して戴けますかと聞かれたので、必ず出席するから気を強くもてと話し別れた。JG生命の田所社長とは面識があるが、まさかあの田所社長の所にめぐみが嫁いだとは驚きであった。しかし何という縁なのか、またまた運命のいたずらなのか。村上君に田所社長の調査を頼んだ。その夜、長野の美奈子から電話があった。一通り話し合いの内容を伝えたが、美奈子の話だともめぐみは夫の田所徹を愛しているようで未練もあるが、あの性格なので浮気は絶対許せないというプライドも大

きい。とにかく田所徹が浮気したかは確かめてほしいと言つて電話を切った。日本と違いドイツでの浮気調査となるとどうしてよいか判らなかつたが、いつも使っている調査会社に相談してみた。蛇の道は蛇である。調査会社によると海外駐在員や海外出張などを対象にした調査が結構多く。この会社でも年に数回は調査を請け負っており、多少割高にはなるがドイツでも可能だと説明を受けた。調査機関は一か月と区切つて調査を依頼した。しばらく神戸を留守にしていたせい、母も妹もそしてお手伝いさんのサキコさんまで山田花子に取り込まれていた。母も妹も御祖父さんが設立したU大学なのに妹の後は後継者がいないと嘆いていた。露骨に花子なら研究者として申し分ないしギリギリ子供も産めると言う始末だった。お手伝いのサキコさんも「花子さん、さっぱりして気持ちの良い方ですね」と追い打ちをかけてきた。秘書の村上あてにJG生命の田所社長が私に会いたいと連絡があつた。田所家でも先日のめぐみとの話し合いに同席した私のことを調べたのだろうかと思つた。私は熊本のめぐみにこのことを話し合うべきかを尋ねた。めぐみは義母とは違い

義父は道理の判る方なので、会ってくださいと答えた。それを受けて村上に日時を設定するように頼んだ。

田所社長に会うために東京行き支度をしている時に、山田花子が訪ねてきた。これから「これから東京行きの新幹線に乗る」と言う。「話が有るので一緒に行く」と言い出した。「もちろんグリーン車ですよ」チャツカリ屋の本領が発揮された。新幹線の車内の中で花子が話した内容は、加納弥生の消息だった。その情報は鈴木裕君の娘である雅子からもたらされた。大学で妹の薫と花子が最後に残った加納弥生の話をしていたら傍らにいた鈴木雅子が「もしかしてお役に立てるかも」と言い出したのがキツカケだった。雅子の話だと彼女が小学六年の時、丁度、学校創立五十年で記念行事の一環で卒業生から便りを募集したことがあった。たまたま雅子は編集委員だったのでその便りを読んでいた。数十通の便りの中にインドネシアで青年海外協力隊の隊員として活躍していた女性の便りだった。その卒業生の名前は忘れたが、その人がインドネシアの病院でボランティアをしている女性と親しくなり話しているうちに同じS島のK小学校の先輩だと判

った。

ボランテニアの女性は現地の人と結婚していて元は看護婦で姓は忘れたが名前は弥生だった。当時、雅子の親友で編集委員の子と名前が同じ弥生だったので、親友の子が大人になったら青年海外協力隊に入ると言っていたので覚えていた。その弥生さんが加納弥生さんかは判らないが、その便りは採用されて五十周年の小冊子に乗ったはずなので、小学校の図書館には現物が所蔵されているはずだと雅子は花子達に説明した。その夜、花子は東京にいる同級生を、松本幸子のバーに集めた。私も支払いの為、同行させられた。松本幸子は杉山との結婚の為、来月には店を閉めると言った。結局、幸子は飲み代を受け取らなかった。

JGホールディングの相談役室にJG生命の田所社長がやってきた。まず田所社長は妻と長男の言動を詫びた。そして妻が話したことは真意ではなく、次男の徹とめぐみとの間の子は、私たち夫婦にとって初孫で、仮に離婚という話になると孫たちと別れなければならないと言う思いが、あの言動になったと言いつくした。私は、めぐみのことは娘同様に思

っているので、彼女の意思を尊重すると共に幸せを念願している。いずれにしろ来月にはめぐみの夫である貴方の息子さんが帰国してからの話にしましょうと言った。田所社長は「判りました」「本日は、お詫びとご挨拶に伺いました」ので「息子が帰国いたしましたら再度、ご連絡をさせていただきます」と言って帰った。

私は、加納弥生の消息を知るためS島にいる岡部誠一にK小学校の図書室を訪ねてもらった。岡部によると五十周年の小冊子の中に確かに青年海外協力隊の女性からの便りが掲載されていてその文章の中には加納弥生の名が登場していた。その便りをコピーして貰ったので、メールで送ると岡部君から連絡があった。その文章を読むと加納弥生は日本に留学していたインドネシア人と結婚し双子の娘をもうけていた。娘が現地の小学校に入学したので、看護婦の経験を生かしてボランティアをしていると書かれていた。その文章を書いた人は山崎節子と記載されていた。早速、青年海外協力隊の母体であるJICA（ジャイカ）に問い合わせると彼女は三年前に日本に帰国していて現在はなんと小野和子教授が

いるJ大学の講師をしていた。小野教授に電話で聞いてみると山崎節子は確かに大学でボランテイアの講義を、週一日三時間を担当していて知り合いだと言う。会いたいと言うと明日が丁度、講義がある日で大学に来るので話して連絡をくれることになった。当日、小野教授から連絡があり、山崎講師から講義が終わる午後四時以降なら会ってくれるとの連絡だった。私は村上を伴ってJ大学に向かった。すでに小野教授から加納弥生について話を聞きたいとこちらの意向は伝わっていた。山崎講師の話だと、インドネシアで親しくなった後も連絡を取り合っていたが、帰国後は途絶えていると言った。山崎講師の話だと、今から四年前に山崎弥生の夫が、ゲリラの爆弾テロにより死亡したことにより弥生は夫の両親そして双子の娘の面倒を見るため身を粉にして働いていると言う。

山崎講師が帰国するときには、インドネシアの首都ジャカルタで看護婦をしながら日本企業のJG物産インドネシア支店で通訳をしていたと言う。通訳の仕事は不定期だが時間給が高いので看護婦として勤務する病院には迷惑をかけるこ

とになるが以前この病院でボランテイアをしていたので理解してもらっていると話したと言う。私は、ここでもJGの名前が出たことに運命を感じた。村上にはすぐにインドネシア支店に連絡して弥生の近況を調べるように話すとともに近日中にインドネシアに行くことになるだろうから準備をするように命じた。

村上がJG物産インドネシア支店長の話として、加納弥生は現在でも通訳として契約しているが双子の娘が来年、大学入学の年齢なのでその費用を捻出するために最近は通訳だけではなく翻訳の仕事もしていると言う。翻訳の仕事は早く正確だが体を壊さないか心配していると支店長は話したと村上は私に報告した。

すぐにでもインドネシアに飛ぶつもりだったが、事件が起きた。父親が倒れた。幸いにも大事には至らなかったが、継母は夫が仕事から手を引くことを望んだ。私は、JG物産の社長職を父親に押し付けたこともあって責任を感じていた。すでに父親は七十七歳になっている。私は、JGグループの持ち株会社JGホールディングの社長と父親が務めていた

JG物産の会長になることに決めた。父親はJGホールディングの会長職のみとなり、実務はほとんどなくなった。いろいろな手続きや問題をクリヤーするのにひと月近くかかってしまい。ひと段落するとすぐにめぐみの夫、田所徹が帰国した。私は、届いたばかりの田所徹のドイツ駐在時の行状調査書を見ていた。幸いなことにめぐみが危惧していた浮気は確認されなかった。ただその浮気問題は確かに存在していた。調査によると田所徹が勤務する大手商社B社のドイツ駐在事務所はあるドイツの機械メーカーとの間で日本代理店契約を獲得する為、田所は上司に競合する日本企業の情報を得るよう命じられた。その為、ドイツメーカーの女子社員に接触をしていたところ、その女子社員の恋人が騒ぎを起こし、その話がドイツの日本人社会にデマとなって拡散したのが真相だと書かれていた。田所の上司も迷惑をかけたことを認めており場合によっては田所の妻であるめぐみに直接説明の為、帰国するとまで言っていることを確認したと報告書には書かれていた。田所徹が単身、私を訪ねてきた。彼は、めぐみとのことで私を煩わしたことを詫び、また、親が出てき

たことを詫びた。これから熊本のめぐみの所に行くので御挨拶にと言った。彼は、今度の問題は自分の軽率さが招いたことでありめぐみに謝るつもりであることも述べた。私は、正直に独断でドイツでの行動を調査したことを話した。そしてその結果は既にめぐみには伝えてあるので、心配しないようにと告げると、彼の顔から憂いが消えた。後で、聞いた話によるとめぐみは二人の子供と共に東京に戻るといふ事だった。

村上がインドネシア出張の予定を持ってきた。JG物産の会長となり慣例により各支店を回る行事の一環と位置付けられていた。普通は、一番にアメリカに行くのだが、私は長くアメリカ支社長の職にあつたので、最初の訪問はインドネシアにしてもらった。話が終わったと思ったら、村上が一つ問題がと切り出してきた。山田花子が夏休みになったので、弥生に会うために同行したいと村上に要求したという。もちろん自費で参加するとは言っていたが、チャツカリ屋さんの異名を持つ花子だった。村上は、弥生も私たちと話すより花子の方が打ち解けるのではないかと言った。私も仮に援助す

るにしても花子が居た方がスムーズに事が進むと考え、費用は私が持つことにして同行が決まった。インドネシア支店には契約している通訳は弥生一人なので、特に指示は出さなかった。

空港に支店長と一緒に出迎えに来た弥生は、私たちに気が付かなかった。JG物産の会長一行という事で、支店長からも色々言われていたのだろう。緊張している様子がありありと判った。すると花子が「弥生。久しぶり」と声を掛けた。弥生は花子の顔を凝視すると、「花ちゃんなの」と言った。花子は傍らの私たちを指して「誰だかわかる」と弥生に言った。弥生は「滝田先生」「村上君」と声を絞り出すように言った。支店長はキョトンとした顔をしていたが、私が「この人は私がJGに入る前、教師時代の教え子です」と説明した。スケジュールに従って支店を訪れた私は、支店長と二人で支店の現状と加納弥生の勤務ぶりの説明を受けた。支店長によると年々、取引が増えていて、インドネシアの役所との折衝や書類の処理などで本社に現地採用での増員を要求しているが色よい返事がもらえない。現地採用の筆頭には弥生を

考えているとも言った。私は、弥生には日本に戻ってもらいたいと考えていたが、支店長は亡くなった夫の両親の面倒を放棄する人ではないので、それは無理でしようと言う。

宿泊するホテルに私たちは、弥生と双子の娘を呼んだ。二人の娘はエキゾチックな顔立ちで、日本語もペラペラだった。私は、弥生に日本での生活を考えるように話したが、やはり支店長の言うように無理だと言われてしまった。花子はそれではと、娘二人の日本留学を勧めた。花子の勤務するU大学はグローバル化の波を受けて国際学部を去年から開始していた。費用は、奨学金制度や援助者にはJG物産会長の方もいると私の顔を見上げた。私は、十分な支援を約束した。幸い神戸の家には空いている部屋もあるし元学長の母もいることを弥生に説明し、安心するように話した。そして弥生自身も近日中にJG物産インドネシア支店の正社員の辞令が出る。正社員となれば生活も安定する、ただ正社員となると現地採用でも二か月間の日本研修がある。その期間に合わせ、て娘たちを日本に帰国させれば、たとえ二ヶ月でも親子が一緒ならば日本の生活にも慣れるだろうと私は言った。弥生は

すすり泣きながらお世話になりますと頭を下げた。私は、S島のお墓のことを話すと、母親の死後すぐにインドネシアに渡ったので母親の遺骨も東京の親戚の寺に預けていて、一度帰国しなければと思っていたが、夫の死で行けなくなっていったと話した。村上に全ての段取りを弥生と決めるように話し、私と花子はホテルのバーに向かった。かなりの酒豪である花子に強引に誘われた。少し酔ったのであろうか花子は、これで一度も結婚していないのは私だけですと悲しそうな声で言った。続けて「先生、私と結婚して」と言った。私は、思わず「考えておく」と言ってしまった。挙句に指切りまでさせられてしまう羽目になった。翌日、あれだけ酔っていたから記憶にないだろうと思っていたら、開口一番、花子に約束を忘れないでくださいと釘を刺された。村上の話だと、東京の本社から加納弥生の現地採用を許可するとの内諾を得たので、正式な辞令が下りた段階で、二か月間の本社研修の日取りを決めると話した。私は、神戸の母に弥生の娘たちの下宿を頼んだ。母は私が住居を東京に移したので、寂しい思いをしていたこともあって、歓迎すると言った。又、妹の薫

も大学への入学に便宜を図ると言ってくれた。村上と花子は加納弥生が研修の為、一時帰国をした際に、同窓会を開くとはしゃいでいた。弥生に渡すと固辞するので、娘たちに当座の費用を渡し、帰国の途に就いた。花子は同窓会の話をもとめる為に、沖縄にいる須藤良明君を訪ねたいと言いつ出した。私も十四人の教え子たちで唯一、卒業式以来あっていない須藤君には会いたいと思っていた。成田に着いたその足で沖縄に向かった。

須藤良明君の勤務先であるR水族館を訪ねると彼は、シフトの関係でお休みだと言われた。ただし奥さんは出勤していると言われたので呼んでもらった。奥さんは、東京のお姉さんから連絡はいただいています。今日、おいでになるとは知りませんでした。申し訳なさそうに言った。そして「今は、米軍基地の正門で座り込みをしていると言う」でも午後二時には保育園に娘を迎えに行くので、二時半には家にいますと言います。「連絡いたしましょうか」と携帯を取り出した。便利な世の中になった。どこに居ても連絡が取れる。「須藤君からは二時半以降に自宅までご足労いただききたいとの返事が

あった」

ここが沖縄だと再確認した。JG物産は、防衛産業にも関わりを持っており、私自身、アメリカ時代は、米軍関係者の友人も多かった。確かに米軍基地の七十パーセント以上が沖縄に集中しており、米兵絡みの事件も多発している。須藤君の中学生の頃を思い出していた。成績も悪くはなく、家庭の経済状況も特に悪くはなかった。現に姉の小野和子教授はアメリカでの留学生活も経験している。なぜ彼が、新潟で三十過ぎまでフリーターの生活をしていたのか疑問だった。

そこには真っ黒に日焼けしている須藤君の姿があった。須藤君の家は、かなり広く見方によっては豪邸と呼ばれる家だった。村上君が、この家と比べると俺の家は、ウサギ小屋だと言った。須藤君は、「ここからは東京と違って地価も安いし、自分の力で建てたわけではなく親父の遺産だから自慢にならない」と言った。大学中退と聞いていたが、書齋らしき部屋にはものすごい量の本が整理されていた。職場を早退してきたと言う奥さんの手料理で酒盛りが始まった。沖縄に来て泡盛の洗札を受けたという須藤君は花子と張り合うように飲

み始めた。彼の話だと大学を中退したのは学生運動と関わり、同志と信じていた親友の裏切りに遭って自分を見失った。しかし沖縄の開放的な自然の中で立ち直り、妻との出会い、娘の誕生と広く世間に目を向け始めた。その中で沖縄の現状を変えなければと言う思いが湧いてきたと言う。私たちは、夜が更けるまで議論に付き合わせられることになった。翌日、二日酔いの私たち三人を職場の水族館に案内してくれた。そして同窓会には必ず出席すると約束してくれた。私たちは東京に戻った。花子は名残惜しそうだったが神戸に戻った。S島の岡部誠一から連絡があった。家のリホームが終わり坂田茂子も母と移り住んできたと言う。一週間後に内輪で披露宴をするので出席してほしいとの話だった。すでに二人は入籍しているとも言った。

披露宴には、男性陣として私と村上君そして岡山の鈴木裕君、大阪の竹田雄一君がいた。鈴木君からは娘の雅子が岡山の家に戻ったと報告を受けた。妻とはまだ完全に打ち解けていないが時間が解決するでしょうと言っていた。又、女性陣はインドネシアにいる加納弥生以外五人全員が参加していた。ど

うやら山田花子が動員をかけたらしい。村上が漏れ聞いた話だと私と花子の件を討議する為に集まったらしい。披露宴は盛況のうち終わった。しかし漁師という職業の人は、皆、豪快で酒が強いのに驚いた。神戸に戻る予定だったが結局、その日はS島に泊ることになった。その夜、ホテルのラウンジに女性陣から呼び出しを受けた。案の定、私と花子のことだった。私は、花子には親近感を持っているが、好きだとか嫌いだとか言う前に、教え子というハードルは高く、歳も離れているし、亡くなった妻子のことも頭にあると言った。そして「父と母が離婚したケースとこの関係はほぼ同じなのも気になる」。まず口火を切ったのは松本幸子だった。「歳が離れていると言っても八歳しか離れていません最近では孫みたいな娘と結婚する芸能人も多いです」と言った。次に、金田澄子が言った。「高校生と教師なら問題だが、花子は四十一歳だし先生は五十二歳」「理解できませんわ」と追い打ちをかけてきた。「由美子」と「めぐみ」もそれでは花子が可哀想と言った。教師時代もそうだったが男子生徒と違い、女子は集団になると太刀打ちできなかった。花子は「可哀想」

と言われると涙目になった。そして「私、教師を辞めても構いません」と言った。私は、少しうろたえて前向きに考えると政治家みたいなことを言ってしまった。「前向き」と言う言葉が追加されたわねと澄子が花子に言った。澄子が夫健一のことで涙を流していたシーンが頭をよぎったが、女は、男より何倍も強い生き物だなと思った。

翌週には、松本幸子と杉山の結婚式が控えていた。再婚とはいえJG証券の常務となれば業界関係者やJGグループからも多くの出席者がいた。披露宴の新婦側の主賓席に私がいることが波紋を呼んでいた。JG関係者はもとより業界筋の間でも注目を浴びていた。中には、挨拶にくる者もいたが今後の二人のことを考えて丁重に対応した。新郎はJGグループ代表の後ろ盾を持ったことをアピールしたことになった。

インドネシアから加納弥生と双子の娘が成田に着いた。

S島では同窓会が開かれる。ホテルの歓迎ボードには「滝田先生と二十八の瞳」様ご一行と書かれていた。私と生徒十四人全員参加の同窓会で私は「山田花子」との婚約を発表することになっていた。

